論文審査要旨及び担当者

報告番号　甲　乙　第　　号　　氏名　白川　恵子

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授　巽　孝之
　　文学研究科委員、Ph.D.

副査　筑波大学文芸・言語学系助教授　　宮本陽一郎
　　文学 博士

副査　カリフォルニア大学バークレー校文学部英文科教授
　　サミュエル・オッター（Samuel Otter）Ph.D.

論文題目　“Antebellum Monsters:Race and the Subversive Imagination in the American Narrative Tradition”

白川恵子君の本論文は、American Renaissance の代表的作家がいかに非主流文学との間に社会的・政治的・文化的相互交渉を行ってきたかを考察しつつ、American Narrative が表象する被支配者側の体制転覆的想像力が、南北戦争以前以後の文学にいかに影響し継承されているかを分析した、文学史的にも文化史的にも洞察に満ちた研究である。本文各章は以下のように構成されている。

Introduction

Chapter 1　The Monstrous Birth of Spectacle: Transgression, Confession, and Execution in Turner, Bunker, Hawthorne, and Dixon

Chapter 2　Nat Turner’s Children: Apes, Baboons, and Orangutans in Poe, Wright, and Styron

Chapter 3　The Paradox of Independence: Temperance, Race, and Subversion in Weems, Whitman, and Douglass

Chapter 4　Returning to Old Virginia: Liberation, Appropriation, and Reconstruction in Stowe, Henson, Reed, and Styron

Chapter 5　Face Divine, Race Demonic: Tattooing, Captivity, and Spectacle in Melville and Oatman

Conclusion　Americanizing the Holocaust: Discourse and Genocide in Styron’s *Sophie’s Choice*

論文概要

本論文は、アメリカ文学の古典を多く生み出した 19 世紀中葉の American Renaissance の作家が、いかに大衆文学史や民衆文化史との間に、社会的、政治的、文化的相互交渉を行ってきたかを、American Narrative の視点より多角的に考察するものである。ヴァージニア入植以来、アメリカは人種的対立と相互交渉の現場であったが、そのような文化史的脈絡において、被支配者側の体制転覆的想像力が、人種問題激化の時代であるとともにアメリカ文学の再興期でもある南北戦争前期文学にいかに影響を与え、かつそれ以降の文学にいかに受け継がれているかといった問題をより深く考察するために、本論文は 19 世紀作家 Nathaniel Hawthorne, Walt Whitman, Edgar Allan Poe, Frederick Douglass, Josiah Henson, Harriet Beecher Stowe, Herman Melville から 20 世紀作家 Richard Wright, William Styron, Ishmael Reed らの作品群を取り上げる。

アメリカン・ルネサンスは、時の帝国主義政策に合致した合衆国内外の領土拡張と奴隷制問題とが主要政治課題であった南北戦争以前の時代、いわゆるアンテベラム期に合致する。入植以来、WASP は、アフリカ人、アフリカ系アメリカ人、および先住民を「非人間的」かつ「怪物的」人種とみなし、民主主義国家の大義名分とは裏腹に、先住民虐殺を反復し奴隷制度を存続させてきたが、ホーソーンはこうした国家体制や誕生の歴史そのものが「怪物的」であると洞察した。本論文はこうした歴史認識に立脚し、構築主義の立場より、人種における支配と非支配の関係をアメリカン・ナラティヴの系譜の中に探っていく。

もちろん、この分野に関しては新歴史主義批評家 David S. Reynolds をはじめ、すでに多くの先行研究が存在する。にもかかわらず本論文が独創的な点は、WASP 作家が異人種を如何にとらえたのかを分析する過程において、1831 年に勃発した黒人奴隷ナット・ターナーの反乱をアメリカン・ナラティヴの伝統に組み込み、そこで培われたメタファーがその他の文学作品や歴史的事件とのあいだにインターテクスチュアルな関係を結んでいくのを解析したところにある。それは、ナット・ターナーの奴隷反乱によって触発された体制への反逆的想像力が、ターナーという個人の水準を超えて、広くアメリカン・ルネサンス期以降の文学や文化へ浸透していったいきさつを見出す作業となる。だからこそ、本論文の射程は 19 世紀にとどまらず、20 世紀は 1960 年代にターナー・リバイバルを巻き起こした、William　Styron の奴隷制および黒人種表象までをも標的

に据える。また異人種をグロテスクな非人間と見る体制側の定義が極めて見世物的な人種表現により支えられていた事実を積極的に再検討する。

具体的に対象とするアメリカン･ナラティヴは､広く Execution Sermon-Crime Narrative から Murder-rape Narrative, Temperance Narrative, Slave Narrative, Captivity Narrative にまでおよぶが、そのゆえんは、トマス・グレイの筆になるターナーの告白すなわち『告白原本』の内容と体裁が、犯罪・処刑体験であると同時に、ターナーの階級と人種を考えれば、捕囚／奴隷体験記としても読むことができるからである。かてて加えて、ターナーの幼児経験は、典型的なピューリタンの回心体験に依拠し、しかも内部に禁酒物語にも通じる要素をも兼ね備えているからである。こうした見地より、ターナーの事件のもつ物語学的可能性をアメリカン・ルネサンス期のテクストや大衆文化のコンテクストに照らして再検討すると、いかなる「怪物」像が浮かび上がってくるのか。

第 1 章 “ The Monstrous Birth of Spectacle: Transgression, Confession, and Execution in Turner, Bunker, Hawthorne, and Dixon ” では、ナット・ターナーの『告白原本』（1831）、同時期、見世物の舞台で活躍した中国人シャム双生児バンカー兄弟の宣伝用パンフレット、ホーソーンの『緋文字』（1850）と「牧師の黒いヴェール」（1835）、トマス・ディクソンの『クランズマン』（1905）とその映画版である『国民の創生』（1915）を、異人種による性的犯罪、処刑、見世物、センセーショナル・ジャーナリズムを手がかりに、植民地時代の処刑の日の説教と犯罪告白の伝統から考察し、今日のホラーや猟奇殺人物語はもちろん、アメリカン・スペクタクルの政治的本質を看破する分析がなされる。

第 2 章‘ Nat Turner’s Children: Apes, Baboons, and Orangutans in Poe, Wright, and Styron ”は、三人の南部作家による murder-rape narrative を比較対照する。具体的には、エドガー・アラン･ポーの短編「モルグ街の殺人」（1841）、リチャード・ライトの『アメリカの息子』（1941）、ウィリアム・スタイロンの『ナット･ターナーの告白』（1967）に共通する、黒人劣性の言説と南部神話の表象を見直す。その過程において、アンテベラム期、人種隔離政策期、ブラック・パワー期それぞれの時代背景を明るみに出す。

第３章 “ The Paradox of Independence: Temperance, Race, and Subversion in Weems, Whitman, and Douglass ” は、回心体験記と奴隷体験記と禁酒体験記とが、堕落からの訣別と自由の恩寵を得る転向を示す点で深い相関関係を結んでいることに着目し、メイソン・ロック・ウィームズの禁酒教訓譚、ウォルト・

ホイットマンの小説『フランクリン・エヴァンズ』（1842）、フレデリック・ダグラスの演説・自伝の再評価を試みる。3 つのテクストはいずれも、禁酒体験を語りつつ、黒人の白人主人に対する反逆行為というサブ・プロットを内包している点でターナーの言説と共振する。これらを人種と飲酒、独立と隷属の観点から分析し、さらにトマス・ジェファソンの合衆国独立宣言、ワシントン禁酒協会の飲酒独立宣言を介在させてアンテベラム・アメリカの本質へ迫る。

第 4 章 “ Returning to Old Virginia: Liberation, Appropriation, and Reconstruction in Stowe, Henson, Reed, and Styron ” で展開されるのは、白人作家と黒人作家の間のテクストの搾取構造を暴く作業である。アンクル・トムへと同化させられ、文学的に搾取されたジョサイア・ヘンソンとストウ夫人との関係を巧みにパロディー化するイシュメイル・リードの『カナダへの逃亡』（1976）は、一旦は逃亡した奴隷が、敢えて南部ヴァージニアへと帰って来る展開においてナット･ターナーを意識した作品になっており、南部神話を標榜するスタイロンの短篇「シャドラク」（1978）とは好対照をなす。ターナーとアンクル・トムという対極を成す奴隷表象を、ヘンソンやリードがいかに継承し、ストウがいかに利用し、スタイロンがいかにずらしたかを解き明かす。

最終章の第 5 章 “ Face Divine, Race Demonic: Tattooing, Captivity, and Spectacle in Melville and Oatman ” は、奴隷捕囚の逆転劇をメルヴィルの南洋諸島捕囚記『タイピー』（1846）と『白鯨』（1851）に確認し、それをアメリカ国内でのインディアンによる白人一家の惨殺と捕囚の実例、オートマン一家殺戮事件（1851）と連動させる。メルヴィルの物語とオートマンの悲劇に共通するのは、白人が異人種の囚われ人となった折に付される刺青が人種的堕落を表象することへの恐怖である。大衆の刺青に対する関心と恐怖は当時、見世物の舞台で活躍した、白人刺青捕囚者達の存在を炙りだす。顔に刺青を入れられた上、5 年に渡ってインディアンと共に生活し、その後白人社会へと生還したオリーブ・オートマンのその後の人生を鑑みたとき明らかになる権力関係の逆転構造は、ターナーの語りの戦略と一脈通じる要素を有するだろう。

結論部である “ Americanizing the Holocaust: Discourse and Genocide in Styron’s *Sophie’s Choice* ” では、黒人奴隷制と先住民殺戮の歴史をアメリカン・ホロコーストと見なす批評に倣いながら、スタイロンの『ソフィーの選択』（1979）にも同様の捕囚者逆転の構図が貫かれていることを明示する。

審査要旨

本学位請求論文の最終審査にあたっては、審査委員それぞれが提出した長文の所見をもとに、2003 年 8 月 21 日（木曜日）の午前 10 時より約 2 時間半、慶應義塾大学三田校舎研究室棟において、審査委員 2 名（巽および宮本）が執筆者に対する徹底的な口頭試問を行った。

その結果、審査委員会は、本論文がアメリカ文学の正典のみならず、大衆文学、歴史資料、映画表現までも視野に入れつつ、そこに秘められたインターテクスチュアリティを大胆かつ精緻に読み解いていく画期的なアメリカ文学史的研究であるという点で、見解の一致を見た。単に個々のテクストの解釈を刷新するのみならず、ここには植民地時代から現代にまで至る「アメリカン・ナラティヴ」というスケールの大きな議論がくりひろげられている。以下に、審査委員各人の所感をまとめ、最終的な審査報告としたい。

まず本論文では、ほとんどすべてのページに才気あふれる閃きが感じられるが、それはまた論者の堅実で労をいとわぬ方法論に支えられている。いかなるテクストを論じる際も、先行研究の最良の成果が余すところなく参照され、それをしっかりと踏まえつつ論者の閃きが披露される仕組みになっていることは、この論考を今日のアメリカ文学研究の最先端に位置づける。第１次資料の調査・発掘に関しても、細部における分析の明晰さについても非の打ち所がない。

こうした誠実な研究姿勢に加えて、現代の文学テクストに歴史的洞察の契機を求めるユニークな方法論が本論文をいっそう魅力的なものとしている。本論文はアンテベラム期文学についての論考であると同時に、ある意味においてはウィリアム・スタイロン論としての一貫性も持つものとなっている。アンテベラム文学論とスタイロン論、さらにはアメリカン・ナラティヴ論という一見大きくかけ離れた理論体系をランダムに併存させるようでいながら、やがてそれら別々に見えた糸が一気に収束して焦点を合わせ、単独の理論体系では望み得ないほどの説得力を発揮するばかりか、相互に洞察を深めあっていくというスリリングな展開を示した点において、本論文は圧倒的な独創性を示す。

その優れた方法論は、百ページ近い長さを持ちながらも緊迫感に満ちた第１章の段階から明らかだ。ナット・ターナーの『告白原本』、アンテベラム期のシャム双生児をめぐるパンフレット類、ナサニエル・ホーソーンの『緋文字』と「牧師の黒いヴェール」、さらにトマス・ディクソンの『クランズマン』とＤ・

W・グリフィスの『国民の創生』という意表をついた素材を取り上げ、そこから体制を問い直す反逆的想像力（Subversive Imagination）の系譜を読み取っていく分析はきわめて鮮やかである。とりわけ『告白原本』とシャム双生児言説に関する読解の精緻さは、論者の力量を端的に物語る。これらの扇情的なテクストに対するどこまでも冷静かつ客観的な分析と、ホーソーンの古典的テクストに対するやや扇情的な読み直しの対比も、興味深い。

第３章では、ウォルト・ホイットマンの作品中でも昨今では文学史的にほとんど顧みられることのない小説『フランクリン・エヴァンズ』を取り上げ、これを同時代の禁酒教訓譚（Temperance Narrative）をサブテクストとしつつ巧みな読解を施してみせたが、その文学研究上の貢献度の高さは、本章の原型が我が国の英語英米文学研究の中でも最も厳格な審査制度を持つ＜英文学研究＞誌上に発表されたことによっても、容易に証明されるだろう。第５章において、メルヴィルの初期作品であり作家本人の異人種体験に根ざす長編小説『タイピー』『オムー』の延長線上に白人女性オリーヴ・オートマンの捕囚体験を位置づけ、彼女がつまるところインディアン文化とともに自身を救出後に搾取した白人文化においても二重に「捕囚」されていたことを喝破していく筆さばきも、見事なものだ。こうした着実な準備段階を経ているからこそ、結論部において、基本的に20世紀作家であるはずのスタイロンがナチスドイツのユダヤ人大虐殺を主題化した『ソフィーの選択』を取り上げるさい、それが捕囚体験記としても奴隷体験記としてもアメリカン・ナラティヴの伝統を貫いているとする読み直しが充分な説得力をもつのである。

もちろん、古典的アメリカ文学作品を論じる際のやや扇情的なアクセントは、この論文の大きな魅力であると同時に、その評価を分ける要素にもなるだろう。例えば第１章におけるホーソーンの『緋文字』に対するジャンル論的な考察は画期的なものだが、この小説をあえて “ sentimental adultery confession" ” (65) あるいは “ a multiple crime narrative, exploring . . . a case of the 'Unpardonable Sin’ of miscegenation ” (78)といった形式をもつものとして強調する場合、当然これと相容れない先行論と対置されることになる。おそらく論者の『緋文字』論は、そうした対論とのあいだで議論を交わしたうえでも、十分な説得力を持つものと考えるが、しかし本論文で『緋文字』に与えられたスペースは、作品論としての論争の場を開くには決して十分なものとなっていない。また『緋文字』や「牧師の黒いヴェール」における「黒」の色彩表現の中

に人種的含意を読みとる企ては斬新にして大胆ながら、テクストはそれによって犠牲にされる部分も少なくない。また、メルヴィル作品で描かれる刺青とオートマンが実体験として施される刺青とを等価なものとして扱っているのも、いささか議論を急ぎすぎている感が強かった。三人の南部作家——ポー、ライト、スタイロン——のあいだで生じたナラティヴの受け渡しを分析する第２章に関しても、ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアの“ signifying ”理論すなわち文化史的トリックスター理論に立脚しながら、その効用を主張するだけで十分に論証してはいない。それは論文全体にわたり、白川君が「主流文化」（the dominant）と「反逆的文化」（the subversive）の区分をあまりに自明なものと見なしていることにも関係しよう。ここは是非、メルヴィルの中篇「ベニト・セレノ」を、そして補助的にスティーヴン・クレイン作品の中から「モンスター」を扱い、理論を深めてほしかったという意見も出た。

こうした問題点は、ウィリアム・スタイロンに関する議論の場合には全く感じられない。序論、第２章、第４章、結論と十分なスペースを与えられ、多角的に論じられているだけに、これを仮に（論者の意図に反して）作家論・作品論として読んだとしても、全く不満を感じさせない。この論文で壮大なスケールにおいて展開されるスタイロン読解は、これまでのスタイロン研究の水準を、あらゆる意味において凌駕しているがゆえに、そもそも先行研究を連想させることがない。おそらくそれゆえに、その論述にオーヴァーステイトメントが見られない点も優れた批評的節度として評価できる。アンテベラム期の文化の見直しと、スタイロンにおけるアンテベラム期南部の記憶の再編成を呼応させつつ展開される議論こそは、本論文の白眉であろう。

ただし本論文を公刊する場合、全体の構成に関しては、若干の再考の余地がある。第１章の圧倒的な存在感のゆえに、以後の章にやや派生的な印象が否めない。それぞれの章は、それ自体として十分な完成度を持っているだけに、難しい問題である。序論で各章の議論が要約され、各章の序論部でさらに各節の内容が要約されるという構成は、学位請求論文としての形式を尊重した結果と考えられるが、複数の問題系を往復しつつ考察を深めていく本論の特色に沿った、よりふさわしい提示法もありうるだろう。各章の序論部において、章と章のあいだの問題の受け渡しをさらに入念に練り直せば、すべてが第１章から派生し第１章に帰着するといった印象も避けられるのではあるまいか。

改稿の余地をもう一点探すとすれば、それは全体の議論のなかで頻用されて

いる“ subversive ”はもちろんのこと“ sensational ” “ monstrous ”というキーワードの意味するところをさらに展開することであろう。これらの用語の選択は、言うまでもなく適切な先行論を踏まえたうえでなされたものであり、それ自体として問題があるわけではない。しかし例えば、論者が第１章で論じた一連のテクストを“ the intersection of sensationalism, slavery politics, and the crimes/sins of America ” (94)に位置するものと結論づけるとき、「センセーショナリズム」はすでにアンテベラム期の文学のひとつのモードという以上の意味合いを与えられることになる。そうであれば、単に「センセーショナリズム」の系譜を繰り返し読み取るだけでなく、そもそも「センセーショナリズム」という言説枠が、なぜどのような必然性を持って生成されたのかという議論がなされてもよい。ときとして本論文のなかで“ sensational journalism ”といった標語でまとめられている言説群のさらに精緻な分析も、あってしかるべきだ。

センセーショナリズム、あるいはそれが対象とする「怪物的なるもの」をめぐる想像力の生成過程が考察されるとすれば、それはさらにこうした「ナラティヴ」がいかなる条件のもとにどのように媒介されつつ、合衆国文化のなかであたかも「伝統」であるかのように、その生命を綿々と保ってしまったのかという問題にも、答えることになるはずである。本論文の各章で展開される合衆国文化の鮮やかな再考は、もはやかつてのアメリカ研究を支配した「伝統」「神話」あるいは「国民性」といったパラダイムを許容するものとは思えない。この論文では「合衆国」という用語が避けられ、今日では引用符つきで用いざるをえない「アメリカ」という用語が意識的に採用されているだけに、いっそう強調が望まれる点だ。論文全体として見れば、論者はすでに新歴史主義やポストコロニアリズム、はたまた文化研究一般で採用される「アメリカ」の準拠枠をとうに超越したところで議論を展開しているのであるから、たとえば序論ではあらかじめその線に身を置いて、旧来の批評方法論への本質的批判を試みるところから始めてもよかったのではないか、少なくとも単行本として公刊するさいにはそのようにするべきではないかという積極的な意見が出たことも、ここに明記しておく。

いくつかの課題を残しながらも、本論文が模範的な研究姿勢を貫き、今日の合衆国文学研究の最先端に新たな論議の場を開く、画期的な業績であることは疑いない。その論考はどこまでも創意と閃きに満ち、とどまることない該博な知識と探求心を示している。博士号請求論文にふさわしい成果として評価する。